慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	マルクスの価値論に対するBeerの批評
Sub Title	
Author	三邊, 金蔵
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1924
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.18, No.2 (1924. 2) ,p.298(144)- 303(149)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	雑録
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19240217-0144

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ねると共に愈々重要のものとなり行くのである。即ちホッブハウス(L. T. Hobhouse)氏に依れば近代的國家は、自由主義的原理の諸要素(elements of liberal principle)を結合する方向へと遙かに進んで居るのである。

附記　本稿は專らホッブハウス氏の「自由主義」(L. T. Hobhouse, Liberalism, 1911) の第一章に據つたものである。（一月十七日）

マルクスの價値論に對する Beer の批評

三邊金藏

前號所載の拙稿「マルクスの二の價値說と平均利潤率の問題」が既に剞劂に附せられたる後に於て、自分はマルクスの價値論に對する Beer の批評中に自己の所論に甚だ有利なる一節あるを發見したのである。因つて今之を紹介して自說の補註となす可しとして、最初に Beer の著 Karl Marx, Sein Leben und Seine Lehre 中より當該個所を引用し來れば左の如くである。

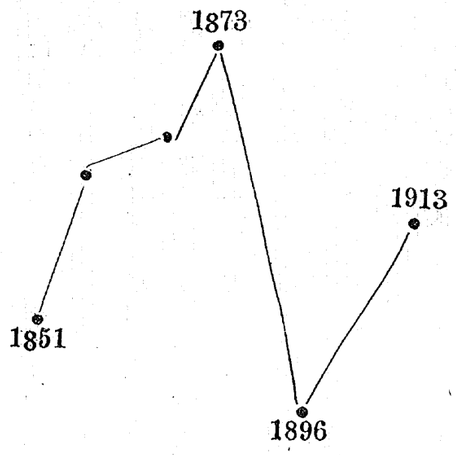
「マルクスの價値論は過去六十年間に於ける未曾有に强大なる富の蓄積も若くは又た價格の運動も共に之を說明せぬのである。富は、價値にて之を測定すれば、過去數十年の間に於て生ける勞働力の增加に幾倍かして增進した。吾々は此所に於ては古き形式を轉換して、富は幾何級數にて增加し、生ける賃銀勞働力は算術級數にて增加すと謂ひ得るのである。マルクスの許に於ける最大の難點は、彼が發明家、發見者、化學者、物理學者、工業上及び農業上に新生面を開拓する率先者及び組織者を生產的價値創造的要因と見做さぬといふことである。化學上の發明及び發見に依り土地の生產力を倍加し、工業上の廢物より幾百萬の價値を齎らす思索家、勞働の生產力を幾層倍ならしむる新しき動力の泉源と新しき生產手段とを人間の掌裡に置く物理學者、生產力を綜合し且つ新しき勞働方法を導入する組織者――屢々一心不亂の精神的努力を無量に必要とする是等一切の勞働及び創造が一國民の資本量を增加せずして、生產と運搬とに從事する賃銀勞働者の無報酬勞働のみが、然り彼等の餘剩勞働からのみ一國民の資本家的富が發生するといふのである！　然かも何故歐羅巴が資本に豐かにして亞細亞が資本に貧しきや、北亞米利加が何故資本に力强くして露西亞帝國が資本に力弱きやを主として說明し得るものは彼の發明家發見者、組織者及び經濟上の率先者等の精神的創造力に外ならぬのである。自分は敢て「主として」といふ、蓋し完全に此事實を說明せんが爲めには更に政治的自由を擧げねばならぬからである。然も此は亦た資本家的革命の成果たるのである。

世人は或は此非難に對して略ぼ次の如くに答へるかも知れぬ、曰く發明家組織者及び實際に活動する企業家の行爲が富を創造することは何人も爭はぬ所であるが、併し彼等の行爲は資本家的に何等の新價値何等の餘剩價値をも生產するものではない、彼等の行爲は唯々勞働の生產力を倍加する上に寄與する丈けである、換言すれば商品貨物一個當りの勞働量を減ずるに過ぎない、若くは商品貨物一個當りの價値を低下するに過ぎないと。

乍併、此答は經驗と合せざる無實の理論であつて、且つ又た工業に關して之を言ふ限りに於てはリカルドオの許に於て既に之を發見するのである。若し此答にして眞實なりとせば、其は

結局價格の運動中に自ら顯現せねばならぬのである。最近二世代間に於て歐米諸國は一七六〇年より一八二五年に亘る彼の英國產業革命の如きは是に比すれば殆んど兒戲に類すと稱し得可き一大經濟的革命を經驗した。發明家及び發見家、經濟上の率先者及び組織者は農、工、運輸の各業を裝ふに勞働の生產力を幾層倍ならしめたる技術的手段を以てしたのである。然れば若しマルクスの價値論及び餘剩價値論が眞理なりとせば、此未曾有の革命は必ず終に一八五〇年より一九一三年に至る價格の運動中に發露したるに相違ないのである。即ち價格の運動は一般に極めて下降的であつたに相違ないのである。然も其實際は如何？

毎年 Journal of the Royal Statistical Society とロンドン Economist とに掲載せらるゝ――ソウエルベックの物價指數を基として最近二世代間に於ける價格運動の表を作れば次の如くである――但し一般的運動を示すを主眼とするが故に小なる動搖を無視して直線を以て之を示せり。



猶ほ戰前三十年間の物價指數を茲に掲ぐれば次の如し（Labour Gazette 一九一九年一月號第五頁）

一八八四年	一一四、一
一八八五年	一〇七、〇
一八八六年	一〇一、〇
一八八七年	九八、八
一八八八年	一〇一、八
一八八九年	一〇三、四
一八九〇年	一〇三、三
一八九一年	一〇六、九
一八九二年	一〇一、一
一八九三年	九九、四
一八九四年	九三、五
一八九五年	九〇、七
一八九六年	八八、二
一八九七年	九〇、一
一八九八年	九三、二
一八九九年	九二、二
一九〇〇年	一〇〇、〇
一九〇一年	九六、七
一九〇二年	九六、四
一九〇三年	九六、九
一九〇四年	九八、二
一九〇五年	九七、六
一九〇六年	一〇〇、八
一九〇七年	一〇六、〇
一九〇八年	一〇三、〇
一九〇九年	一〇四、一
一九一〇年	一〇八、八
一九一一年	一〇九、四
一九一二年	一一四、九
一九一三年	一一六、五

即ち上記の圖表に於て吾々は一八五一年より一八七三年に至る向上的運動と、一八七四年より一八九六年に至る下降的運動と、一八九七年以後に於ける向上的運動との三大運動を見るのであるが、物價指數の示す此運動は大體に於て價格の進路を察せしむるに足るであらう。而も

此は商品價値の中には不變資本と相並んで專ら生ける賃銀勞働力が伏在するのみならず猶ほ又たマルクスの計算に加へざりし他の要素が伏在すとの結論に至らしむるものである。而して其要素とは即ち發明家、組織者及び事業指導者の勞働給付に外ならぬのであつて、ペティもスミスもリカルドオも共に酖酌せる要素たるのである」(Beer: Karl Marx 第二版一一二——一一四頁)

即ちベーヤは發明者、發見者、化學者、物理學者、組織者、率先者等の行爲を價値創造の要因中に加へざりしを以てマルクス價値論の最大弱點なりと爲し、之に對して是等人士の行爲は勞働生産力を增加し商品各個當りの必要勞働量、從つて又た其價値を減少せしむるものなりと答ふる者あるときは、其は事實と相容れずとして前掲の圖表を示すものであるが、ベーヤの此主張は本誌前號七三頁より七五頁に亘る個所に於て開陳せる卑說と謂はゞ同工異曲に出づるものにして、從て甚だ有力なる後援を之に與ふるものと爲すも、必しも牽强附會の言を弄するものとは謂ひ難いであらう。乃ち贅て採つて以て自己の議論の脚注となさんと欲するものであるが、併し其意は勿論斯の如き原因に基く勞働生産力の增大は價値の縮小となるものにあらずして却つて其增大を伴ふものなりといふ旣に述べたる主張の眼目に於て意見の一致を見るが爲めに外ならずして、所論の末端に至るまで悉く贊成するが爲めではないのである。故にベーヤが前記の如く過去六十年間に於ける價格變動表を擧げて自己の議論を立證せんと努むるが如きは、假令其大體を彷彿せしむれば即ち足れりとするも、然も猶ほ甚だ困難なりとして自分の遽かに贊成するを拒む所たるのである。而して自分はベーヤが其著の最新版に於て——三版は見ず故に四版に就て之を言ふ——前記の諸表を削除せるは、恐らくは同一理由の爲めなる可しと私かに想像しつゝあるのである。

（附言）

猶ほ序でに前號の所論に小なる訂正を望めば七六頁八行目に「唯だ此理論に從ふときは餘剩價値の一部分は當然資本に其端を發すといふことゝなり」云々とあるを「唯だ此理論に從ふときは餘剩價値は必しも可變資本にのみ其端を發せずといふことゝなり」云々と變へられ度いのである。